

45年の越冬を迎え第二の収容所へ移動させられ、防寒具もなく劣悪な環境の元に発疹チブス、赤痢が蔓延、46年1月末に妹二人を栄養失調で亡くした。私も赤痢にかかったが、薬もなく消し炭をなめていた。アンペラに包んで大きな穴に掘り込むだけ。多くの子どもたちが命を失った。

46年、母が八路軍の被服廠にミシン工に応募、46年8月集団引き揚げが始まる。被服廠では帰国を認めず強制留用となる。旧満州から集められた日本人技術者家族が多く留用となっていた。

その後同じく八路軍管轄の煙草工場に転職、その後凶們市へ移動、48年朝鮮から引き揚げに補充として募集があったが人員制限ため最後の帰国を失った。学校もなく工場で働きながら中国語を習う。八路軍の軍服が与えられ、小日本少年にも八路軍の軍服が与えられ町中を堂々として歩いた。

49年10月中国建国された翌年、50年6月朝鮮戦争勃発、同年11月長春（新京）へ工場と共に集団疎開、長春工場の配属先は総務科、公用信を市内各署に届ける仕事に従事、この間中国人と同席夜間学校に行く。養生の代えなく結核で51年8月母・隆子42歳、内地を思いながら死亡。

52年10月頃人民日報で邦人帰国の記事発見。この記事は忘れられない思い出である。10人程度の日本人技術者がいたので工場では盛大な送別会をしてくれた。公安局のから「遺骨のある」者は事前に検査をすること。公安局に出向いた。公安には文書持参する仕事もあって係官とは面識があり「君は日本人だったのか」「少し言葉おかしいと思っていたよ」と声をかけられ即座に遺骨箱は「開けなくて良い」封印をしてくれた。

53年3月秦皇島から舞鶴へ戦後8年あまり中国での生活を経験した。現始良市加治木町仮屋町の叔父の元に落ち着く。二人の生活が始まる。父は、朝鮮富寧ソ連捕虜収容所で戦病死と分かる。

年の差4歳で加治木中学校に入学、卒業後洋品店を経て59年3月に加治木局に採用され、溝辺、国分局、95年3月退職、退職後広瀬公民館、民生委員3期9年つとめ、鹿児島市の「戦争を語り継ぐ会」に参加、すでに5年になる。

戦争の悲惨さを後世に語り継ぐことが大切であると同時に被害者でもありまた加害者でもあったことも忘れてはならない。先の戦争で犠牲者310万人と言われ、シベリア抑留60万の内6万人が死亡している。過去の歴史をしっかりと学ぶことも忘れてはならない。と思っている。